

〈資料〉

白井仙松回想録について

松下 佐知子

解題

2017年8月に愛知・名古屋 戦争に関する資料館に娘である水谷妙子氏より白井仙松氏の回想録の寄贈を受けた⁽¹⁾。今回はその中のノート（これを「ノート」と呼ぶ）に絞って書き起こした。それ以外にもチラシの裏に書いたメモ書きもあり、豊橋での召集から台湾までの出来事はノートとチラシはほぼ同一の内容であった。水谷氏によれば、フィリピンへ行くまで



写真1 表紙

- (1) 愛知・名古屋 戦争に関する資料館所蔵。資料番号H29-0496。資料中の消してある部分については、[けし]とした後、カッコ内に記述した。また、本文中には現在では不適切とされる語句が含まれるが、そのままとした。「。」「、」は適儀に補った。誤字については、そのままとし、文字の下に〔ママ〕とつけた。

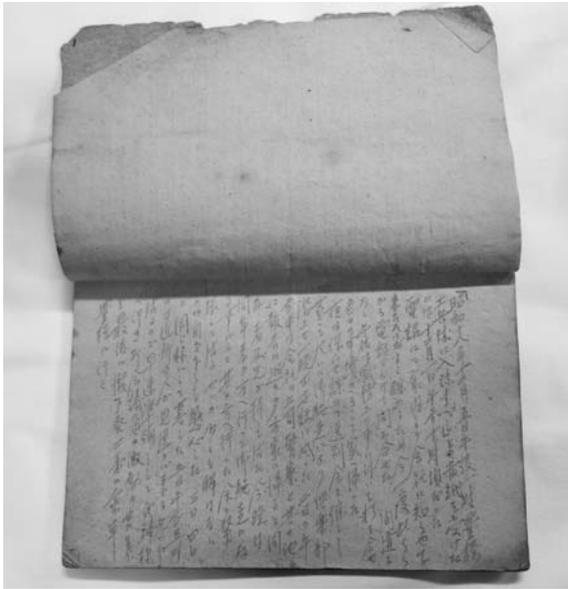


写真2 中身

の記録であるという事だったが、今回は台湾到着以後はノートには記載がないため扱わない。

上の写真二枚は、回想録を記したノートの表紙および中身で、中は横にして縦書き、筆記具は鉛筆である。

なお、水谷氏の聞き取りによれば、白井仙松氏は1901（明治34）年生まれ、勲六等旭日章を持つ陸軍工兵准尉であった。千葉県にある陸軍野戦砲兵学校を卒業し、職業軍人として東京湾の司令部付の後、日中戦争に従軍、帰国後、神奈川県三浦郡久里浜村（現横須賀市）へ移った。それを機に転職し、愛知県東春日井郡守山町（現名古屋守山区）にある両親の実家の近くに移る。そして、アジア太平洋戦争で召集を受けるまでは、住友金属工業株式会社名古屋工場で保安係をしていた。この仕事は、戦後も続けて務めている。

何分、仙松氏ご本人も亡くなり水谷氏も高齢なため、基礎的なデータが乏しく資料を扱う際慎重を要する資料である。しかし、当時の殺伐とした

軍隊生活においても、戦場に赴く途中であるためか日常的な、はげしい戦闘とはかかわりのない部分の回想である。臼井仙松氏の回想録を通して兵士の日常の一例を紹介する。

資料本文

「昭和十八年十二月五日午後一時豊橋工兵隊に入隊すべし」との赤紙を受けたのは、十二月一日午前十時頃だった⁽²⁾。電話にて家内より会社に知らせて来たそうだ。よく確かめるため今一度こちらから電話をかけて問い合わせた。間違いなし。午後は職務上の事に付いて打ち合せ、色々の手続きをして家へ帰った。

夜は保安課⁽³⁾にて送別会を催して貰って、大いに御馳走になり、倶楽部階上で一晩お世話に成った。二日の午前中は会社の上司警察と其の他に報告に廻り、夕方家に帰ると同年者及兄が待って居た。今晚は同年者の方へ行って御馳走になる事にして、其の方へ行った。余り緊張して居るせい、少しも酔はないのに、自分乍らも感心した。三日四日と同じ様にして暮した。五日午前五時には近所の人が見送りに来て呉れて居るので、早速準備をして氏神様へ行き町会議員の激励の言葉を最後に瀬戸発二番に乗車豊橋に行く。

午後一時迄は間もあり、知人宅へ立寄り正午前向山作業場⁽⁴⁾へ行き、兄と二人で昼飯を喰って居ると、向ふの家の中に此れ又支那当時同中隊に居た某伍長も居り、やはり応召で来たからのむと云ふ。

受付が初まった。第一番に受付へ行き、裏門から入ろうとすると火薬庫の方から佐官かとも思われる老軍人が数人の在郷軍人と共にやって来た。良く見ると主計准尉であるから誰か入隊する下士官でも送って来たと直感したが、後に身体検査場にて一所になった。第一番に自分が軍医の前に立つ

(2) 「戦歿者芳名録」によれば、同日豊橋中部第十一部隊の召集をかけている。(資料番号H28-1948、愛知・名古屋 戦争に関する資料館所蔵)

(3) 住友金属工業株式会社名古屋工場。住友金属工業株式会社名古屋工場は、1939年4月に建設に着手した(社史編纂委員会『住友金属工業六十年小史』1957年、141頁)。

(4) 豊橋市向山は、1944年に工兵第三聯隊があった場所である。(岩瀬彰利『戦前の豊橋 空襲で消えた街並み』樹林舎、2016年、3頁)。

たが、軍医は「何処か悪い所がありませんか」と聞くから、「別に悪い所はありません。此の通りです」と答へた。「変りの無い人だから、少しばかり悪くても行って貰はなければなりません、無くて結構です」とて、^{〔ママ〕}身体検査抜きであった。

次は二、三の下士官が型通り受検して何れも良好だったが、其の次が先き程佐官かと思った主計准尉の番だ。裸になって居るのを見ると、余り上肥とは行かぬが先づ中位の太り方だ。軍医の前に立って同じ様に「何処か悪い所はありませんか」と問われるのを待つ様に、「どうも年のせいでせうか、体中がいたくて困ります」と来た。軍医は暫らく無口のまま体を眺めて居て、徐ろに手を出し肩や背中を叩いたり押ししたりした。其の度毎に、准尉殿は其処がいたい、此処がいたいと顔をしかめる。軍医も暫らく考へて居る様であったが、応召係の将校が軍医に小声で「主計だから大丈夫です」とささやいたので、軍医も彼れの背を軽く叩いて「へい宜敷しいです」とて、甲種合格を宣言せられた。

大将暫らくポー然として居たが仕方がない。コソコソと服を着かけた。とにかく彼れは其の日に帰る予定で来て居るから、何一つ持って来て居ない。それも、其筈五十四才⁽⁵⁾では無理もない事ならん。身体検査を終へて割当てられた我々の事務室へ来ると彼れも亦来た。此処でお互に宜敷くと言葉を交わし、与へられた仕事をする事にした。午前中に隊長、小隊長連は入隊したが、買物のため偕行社へ行って居て留守だった。夕飯が済んだ頃四人揃って帰って来たから、先づ入隊の申告をして初顔合せをした。隊長は中尉で比較的若い、他の三人は何れも年長者の中尉一、少尉二名だった。中尉の方は支那事変の際、一年出征して中尉になり、他の二名は大正十五年一年志願より少尉に成ったきり初めての召集で軍隊生活には余程縁遠かったのだ。十二月十日には曲りなりにも動員完結で高師の廠舎に移った。設営のため同廠舎に先行して管理人と打ち合せをしたが、此の管理人は予備役歩兵少佐で仲々六ツケ敷いおやちとの話を聞いて居たから、初めから用意をしてとに角下手に組んでかかった関係上、非常に喜んで何から何迄良く貸して呉れた。各小隊から事務室炊事将校室と室割りは終ったが、

(5) 54歳ほどではないが、前掲「戦歿者芳名録」では、最高齢戦没者は42歳である。

寒いのには実に閉口した。部隊が到着したから、取りあへず毛布の分配やら薪の購入にとりかかり、幸にして主計が豊橋の士官学校に務めて居た関係上、炭から暇給品迄も手に入って大助かりだった。夜は兵室の方で焚火をするから、とても居られない。将校連中も今日はカゴの鳥の様に入隊以来初めて外出するからたのむと云ひ、主計さんも軍装準備に家へやって呉れと云ふから、今晚は帰って来るなど云って家へやった。奴さんが家で泊れば三枚毛布が多く着て寝られるから外泊をすすめたのだ。大将も亦喜こんだ。今晚は兵隊一人一合余りの酒もある事だから娯楽会を開催してやれと思ったから、分隊長を集めて相談したら、皆賛成で娯楽会を夕食後初めた。仲々の勇士も居て面白かった。

十一日は入隊以来初めて下着を取り換へ当番に洗ってもらったら、シャツ一枚紛失して呉れた。夕外出した連中も何時の間にか帰って来た。面会人があって酒煮を持って来たから将校室で四名でやった。炊事の方は何時もキユキユだから、麦に豆で米は探す位のもので、せめて副食物位を良くしてやりたいから、主計のケツを叩く様にしてどうやら間に合してやって居る。

出発の日を早く知る様に云れ、亦隊長に八釜敷く云って、どうやら十七日頃と聞いたから面会日の相談だ。他の将校連中人の忙がしい事も不知らず寝て居るが関の山だ。其れも其の筈何をして良いか分らんから仕方がない。隊長は十二日の日曜に面会を許可しようと云ふが其れは駄目だ、日曜は電車が混雑するばかりか遠い所は手紙が届かんから月曜日にする様話が定まった。早速使役を取って手紙をすらせ、一枚づつ道順を書いて出させ、遠い所は電報を打たせた。明る日は渥美電鉄本社に到り駅長と交渉の結果十三日には晩五時迄高師—豊橋間を十五分運転として便宜を計ってもらう事とした。憲兵隊共連絡をしたが相も変わらず防ちようとか喰ひ物の注意があった⁽⁶⁾。

十三日は早朝より陸続と近親の人々が押し寄せて来た。各将校も種々役

(6) 渥美電鉄は1927(昭和2)年に黒河原まで開通。その後、1940年名鉄電車渥美線として運行。1944年の路線図で高師の駅は新豊橋から四つ目である。(前掲「戦前の豊橋」17～19頁)。高師の軍施設は、最初は日露戦争の際の豊橋俘虜収容所であったが、閉鎖後日本軍兵舎に転用された(豊橋市史編集委員会『豊橋市史』第三巻、1983年、313～314頁)。

割はあったが自分の面会でお童、面会人の方も喰ひ物には随分心配して居た様だったが、持って来た丈は喰わす様云ってやったら、皆大喜びであった。当日は朝から晴天で殊に暖かく、芝生の上で彼処此処と一かたまりに成って懐かしそうに語り乍ら、御馳走を喰つて居り、又唄の初まった所もある。其の中に、自分の所へも来た。

兄と局長、家内、妙子、長男勝行が手紙で注文の御馳走と酒を持って来たから呑んだり喰ったりして高師の駅迄見送った⁽⁷⁾。可愛い坊や共別れる時は涙が先に立つ。真当に坊やとはあれが遠永の別れだった。久し振りに小池⁽⁸⁾の料亭中島屋に一人行って呑んだ(一〇〇円)。

十四十五日とは出発準備をして待機だが何となく気が落付かん。十六日も同じ様に暮れたが、晩方から家に帰る気になったので隊長と話して六時頃から帰った⁽⁹⁾。名古屋へ着いたのが八時頃か、堀田で降りて市電に乗った⁽¹⁰⁾。火園付近で友人の関本錠太郎が電車に乗り込んだ。大曾根十洲楼へ行ったが、新客はお断りで仕方がない、どこも呑む所は無いのでとうとう帰る事にした。友人関本は電車一台先に帰って、私の家へ寄って湯を沸かす様言付ける事にした。一台をくれて瀬戸行に乗ると、中に一人上機嫌の歩兵准尉が居た。彼れは私の傍へ来て話しかけた。彼れは、家は豊橋で歩兵に召集、目下本地ヶ原廠舎に居て、今日は外出との事。自分は此ちから豊橋に行って居る、何れにせよ彼れも十七日に行くと言ふ事だから一所になる事は必然的だった。家へ行くと友人浅見三郎が一升持って来て呉れたから一パイ呑んだ。応召前の山の子即ち四日に直会社の祭の際木センと寒椿を記念に買って来て植へた。家内に良く根付いたかと聞いた所、サアと云って居る丈けで、知るも知らぬも無い。自分では良く付いて居ますと云ってもらいたかつたのに、気のかかぬも程があるとて皿を一枚打付つけたら、口ビルに当って口ビルが切れ血が随分と出たが、尚腹の虫がおさま

(7) 兄は銀一、妻はかまでである(水谷氏より聞き取り)。なお、水谷氏はこの日の事もよく記憶しておられた。

(8) 小池には、福元旅館など軍関係の宿泊者が多い旅館があった(前掲『戦前の豊橋』95頁)。

(9) この日の事も、水谷氏は記憶しておられた。「父は馬で帰って来たように思う」とのこと。

(10) 名古屋市営鉄道の拡大は、1922(大正11)年より6か年事業として行われ、この中で鶴舞公園南の小針から堀田まで伸びる東郊線が敷かれた(新修名古屋市史編集委員会『新修名古屋市史』第6巻、2000年、339頁)。

らん。其の中に兄が来る。とうとう寝て終わった。

十七日の九時頃廠舎に到着。今日は出陣式とて廠舎前の広場で粗末乍ら準備をした。隊からは部隊長代理中島少佐が来て、とに角式を済ました。最後の晩だ、今晚の十時〇〇分の豊橋発軍用列車で出発だから、九時には当所を出る準備をして置いて小池に行き一寸一パイやらかし、八時頃帰廠、直に整列暗闇の中を背囊一ツ背負ひ市民の見送りの中を駆へ着く。列車の割当が終ると乗車。予定通り十時〇〇分気笛一声名古屋に向って突走る。夜中の十二時〇〇分には、名古屋にて歩兵砲兵の兩部隊が乗り込み、輸送指揮官は歩兵部隊の片桐大佐だった。先づ同大佐に隊長が申告に行く様すめ、居所を探し求めたが中々分からない。

出発間際になって斯く探し当て、准士官以上申告をした。片桐大佐は支那事変当時は衛生隊長で中支に居り、各所の戦鬪で一所になり、殊に応山駐留中は隣り合せに居たから、特に良く知って居た……。准士官以上は二等車で三ヶ部隊で一輛で丁度だ。自分の傍には先の吞平君の伊藤歩兵准尉、林、木村と年長の准尉が同席だ。ある物を出し合ふ喰ったり呑んだりして時間を費し、十八日の夜には下の関に着いた。

寒い関釜連絡船待合室の一室に全員一かたまりになって門司に渡るのを待って居る。朝鮮、満洲方面へ行く邦人も沢山親子一かたまりになって一枚の毛布にうずくまって居る。何時出帆するか分からない船を、待つのもあわれに思われる。夜の二時半頃から門司へ渡り初め、全部到着した時は朝だった。兵站が輸送司令部で準備をして呉れた朝飯をふるへ乍ら喰って、先づ運動のため全部を引き連れ門司市の海岸通りを駈走して汗を流し、続いて山上のお宮さんに参指す。帰って来ると宿舎の割当があって、当隊は大里と云って約一里東の方に行つた半田舎だ。下士官一人兵二人を連れて先行し、先づ警防団と連絡をして区域を定めて貰ひ、後は勝手に配分した。一時間半後部隊が到着したので、直に宿舎に入れ今日の部隊日直将校は自分がやる事に定めた。我々の宿舎は、土木建築業請負業者の家で相当大きい家で家族三人女中一人計四人暮しの家だ。隊長、小隊長、自分に有名な大川主計准尉と四人入り込んだ。晩の御馳走には久し振りに畳の上で女中さんの給仕一人前ビール一本に酒一本当てだったが何んとなく心苦しい、それは全部が配給制度のためと常に兵隊の宿舎に当って居るため、当門司

市は財制上非常に困難な事は分って居る。裏の方で隣の奥さん方々が寄り集まって少しばかりの魚或は野菜等を分配をして居る所を見ると全く気の毒でならん⁽¹¹⁾。一日も早く出発したいと念じつつ居る中に二十三日当港出帆の〇〇丸で旅立つ事になった。隊長が何処か一パイやる所はないかねーと聞くから、門司の町では五月蠅から一層の事小倉へ行かうでは無いかと云ったら、其れが良からうと話は定った。早速朝から偵察に出かけ中流以上の料理屋を探し交渉の結果、酒は無いが御馳走は何んでもあるし、兵隊さんなら朝からでも良いと云ふから十二時頃来る予定にして早速帰った。

隊長、杉原と小生と三人で酒一升ビール一打とを持って十二時半頃行った。小倉迄は約二十分で行けるから五月蠅門司の方へ行くより気楽で良い。先方でももう待って居たから着くが早いか初めた。芸者の転更女中ばかりか三味も引けば踊りもやる。呑んだり呑んだりとうとう^(ママ)参いて終って其の場で寝て終った。二人に起されて気が付いたら最早晩だった。其れから宿舎に帰って又やった。之れが内地と別れの呑み終ひだと思へば何となく淋しい気もした。

二十三日早くから行つて船室の割当が初まる。歩兵の副官の指示でやる様命令が出て居るから、或程度は天降り式に居たが、余りにもせまいから腹が立ったので、副官と一寸口論の結果、一ケ小隊分の場席を取った。之れでどうやら一坪八人位入れる様な事になった。三時頃上船が初まり荷揚げが開始された。我々工兵は世帯が小さひのに主計カビクビク者だから酒保品とて何一ツ賄って来ないから、被服位と浮の五ツ六ツ積む位が関の山だが、歩兵部隊の荷物と来たら甚しい。船に乗終ったら某下士官が自分の耳に口を当てて話すには、実はガメ隊の酒二箱(二打)と甘納豆二箱を失敬したから、如何に分配したら良いかと云ふので、其の不心得を戒めたが、今更先方へも返せず、明日当り分配する旨伝へ置きたるも、夜になって出港明朝に成ったら甘納豆は全部盗難に会って一袋も無いが、酒はさすが呑平下士官の監督丈に一本の紛失も無かったから盗まれぬ中に各小隊に六本づつ残り四本を中隊付に分配した。船は二十三日午後十時頃か抜錨して出

(11) 少し後の事にはなるが、1944年12月1日付「西日本新聞」によれば、記事「食糧確保に諸作強化」の中で、福岡県は米麦の供出が各市町村で平等ではないことを認識していた。地域で、食料の不平等があったということになる。

港し初めた。二十四、五日両日は、九州の北の方を進行して居たが、晩方に成って訳の分らぬ港に入った。港と云っても遙に家が見える程度で七、八隻の船が居り、人の話しでは五島列島中の富江港だとの話だった。二十六日早朝未だ人の顔も分からぬ六時頃全員甲板に集合し、愈々内地との別れの記しに、一同皇居遥拝及各自故郷に対して黙禱を捧げた。

六時半には抜錨船は次第に沖へ沖へと出て、八隻の船団は作られた。我々の船は前方より二番目で右列中央だ。左列にはほとんど軍人らしい姿は目へぬから多分荷物船ばかりだろう。一番後方を来る船は約千五六百トンの小さい船で荒波に丸で木の葉の様に難航を続けて居る。三日目の即チ二十八日の朝は其の小さい方は見えなかった。機関故障で引き返したとの事だった。明くれば二十九日〔けし 波浪高く何れも見へない〕が潜水艦監視として浮遊胴体を「ガッシリ」身に着け八倍の双眼鏡を眼からはなさず左舷前方を監視したが、何しろ波浪高きため随分疲労した。其のおかげで夜は一と眠りに寝て終った。甲板から来た兵が台湾が見え出したと云ふ声に眼をさますと共に、自分も亦甲板に昇って見たら成る程南北に連らなる山脈がくっきり海上に浮び上って居る。

彼の山の一番北の端辺が基隆だろうが、彼処へ着いて呉れば良いが、どうやら舵は南に向いて居るからまあ望み簿の体だ。して見ると、此処は〔「飛び込み者」と書き込み〕東支那海だから右舷には支那大陸が見へる筈だがと思つて右に移動して見たが仲々大陸なぞはととも見えない。もっとも、何千万分の一の地図で見ればくつついて居るが大陸—台湾間の広いのに驚いた。船は次第次第に右舵を取り連峰に平行して進行をし初めた。基隆寄港も全く絶望の極に達した時、〔けし 一名〕誰か一人海へ飛び込んだとの話、良く聞いて見ると歩兵隊の上ト兵で一寸気が変に成って居る男だとの事だった。こんな意気地なしなら、任地へ着いたとて役に立つ筈は無いから、一日も早く片付けば良いが、此いつの変りに又召集される人のある事も考へると其の人こそ災難と云はざるを得んか。三十日もどうやら暮れんとする船は、真当に台湾すれすれに航海をして居る。美しい街らしい所は、何処なるや。誰か新竹洲だろうと云ふが怪しいものだ。

三十一日もやはり同じ様な箇所を航海して居るから、台湾の大きいのに驚かざるを得ん。晩方に高雄港に入港するとの事に一同一安心した。西

より廻って港口に到着するや三、四千トンの汽船は無惨にも潜水艦のお見舞を受けて前半分水中に没して居るのを見受らる。高雄港は港口が余りにせまく南北八十米突北北即ち入港に当って右舷は絶べき左舷は低く美しい庭があり旅館らしい家が並らんで居て内地と少しも変らない。今日は大晦日と云ふに何んたる暑い事だと汗だくの体だ。船は定位置に来て投錨、船内では輸送指揮官片桐大佐の名に於て明元旦の遥拝式の件に付き将校下士官兵の集合場所を示されて居るのに准士官のみ何れに行つて遥拝するのさせないで良いのか、ウン共スン共示されて居ないと云つて他隊の准士官連中カンカンになって相談に来た。代表として出征前瀬戸電車内でグテグテになって居た伊藤准尉と自分と二人で輸送指揮官の室に行つて小言がましくツメ寄つた。輸送指揮官片桐大佐は一人切りで室に何か考へて居たが、「よし分つた。帰れ」と云つたから二人自分自分の室に帰つた。

間も無く命令が出て、明朝の遥拝は将校と共にする様あつた。昭和十九年一月元旦は天気も良く皆喜々として早くから「消し 早」甲板上に集合したが、暑いので正月の様な気は毛頭せず、むしろ盆の様に思われた。只甲板上で北方を向ひて遥拝をし、然る後指揮官命令で本日の上陸は真に止むを得ぬ火用外出の外上陸は許さんと来たが、自分としても別に出たい事も無いが、台湾に来て台湾を一度も見ないのも残念の様に思はれた。其の時隊長が「一寸行つて見ようでは無いか」と云うから、直ぐ賛成、公用外出届けに良い加限の理由を書き込んで夜八時迄許可を得て来た。船内の御馳走も大した事も無いから外で喰う約束をして早速出た。初めて見る高雄の街を汗を拭きつつ暫らく歩いたが隊長は人力車に乗ろうと云ふから之れに乗つて繁華街へ行つた。初めて「ペンでけし 見る」味はふ「パイヤ」「けし の」は感心「以下ペン書き」した。二人で一寸した料理屋に行き軽くパイやつて隊長は某方面へ行くと云「けし ふから」つて先に出た（後で聞いたら朝鮮婦人を買つて来たと云つた）。

附 記

今回の資料紹介では、水谷妙子氏に大変お世話になった。この場を借りて、謝辞を述べたい。ありがとうございました。